1 単元名

単元(題材)名：一つの花

包括的な「読み」の基準

文学作品の展開を踏まえつつ作品を対象化し、評価・批評する「読み」

2 単元目標

単元目標

・作品の中の大事な言葉を手掛かりに場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化について、叙述を基に想像して読むことができる。

・視点の効果について考えることができる。

・作品内容を踏まえ、自分の考えを進んで書こうとしている。

観点別評価基準

(主体的に学習に取り組む態度)	(思考力・判断力・表現力)	(知識・技能)
・評価・批評を加える際に、自分の経験を具体的に踏まえながら作品を価値付けしようとしている。	・場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化について、叙述を基に想像して読むことができている。 ・自分なりの考えを主張・根拠・理由の3点ロジックで評価を加えることができている。	・キーワードとなる言葉に着目し、クライマックスを捉えることができる。 ・視点の効果を理解することができる。

【重点目標】

「本質的な問い」

・本作品に描き出されている「思想」とはどういったものか、また、その「思想」に対して自分ならどういう題名をつけるか。

・自分の考えを明確に表出するにはどのような伝え方がよいか？

「永続的理解」

・平和の大切さや、戦争という状況下でも確かにある家族の絆を理解した上で、新たな題名を考えることで作者との違いを明確にしながら自分なりの思想を表出できる。(想像的読解力)(論理的読解力)(認識的態度)

・自分の考えを伝えるときは、聞き手に分かりやすいように根拠・理由・主張のロジックで伝えることができる。(論理的思考力)(批判的思考力)

【方法知】

・山場の始まりをとらえる(「構成」①)

・人物の気持ちの変容に着目する(「事件」①)

・三人称客観視点で描き出されていることを知る(「視点」①)

3 評価方法

【パフォーマンス課題】

あなたが作者ならこのお話にどういう題名をつけるかを考えましょう。その際は、今西祐行さんが題名につけた思いを踏まえて自分ならどう題名をつけるかを記述すること。

【　知的好奇心(新奇性　挑戦性　意外性　複雑性　不確実性)・　有能さへの欲求　・　向社会的欲求　】

知：「挑戦性」を促すために単元当初に批評・評価することの意義を説明し、そのために今回は「題名」をつけるという課題を設定したことを明示する。

有：目標を明確化させ、持続的な努力を促すために、単元当初に一度「題名」付けを体験させ、単元を通してさらによい題名をつけられるよう意識を促す。

向：クラスの友だちのためにという意識をもたせるために、「題名」だけを考えさせた上で、カテゴリー別にグループを編成し、学び合いをしながら根拠や理由を考えていく場を設定する。

【その他の評価方法】

≪形成的評価≫

・授業ノートの記述

・授業のまとめ、振り返り

≪総括的評価≫

・標準テスト(知識・技能)

・パフォーマンス評価(主体的に学習に取り組む態度)
(思考力・判断力・表現力)

4 評価基準

尺度	思考・判断・表現 (想像的読解力)	思考・判断・表現 (論理的読解力)	思考・判断・表現 (批判的思考力)	思考・判断・表現 (論理的思考力)	主体的に学習に取り組む態度 (認識的態度)
3	根拠をもとに平和への希求や家族の絆、一つのものを大切にする心等を自分なりに想像を膨らませながら読み取ることができている。	繰り返し出てくる言葉の意味の違いや場面の対比を根拠にして本教材の「主題」について記述できている。	作品に描き出されていることを根拠としつつ自分の考えを加えながら「評価・批評」をできている。	作者の考えと対比する形や場面を対比する形で作品の評価を加えることができている。	評価・批評を加える際は、友だちの意見を参考にしつつ自分の立場から主体的に「題名」を考えようとしている。
2	このお話を通して平和への希求や家族の絆、一つのものを大切にする心等について言及しながら読み取ることができる。	繰り返し出てくる言葉の意味の違いや場面の対比を根拠にしようとしているが、膨がりが抽象的なまま本教材の主題について記述している。	題名の理由づけの部分が教科書の言葉を根拠として「批評・評価」いている。	作者の考えと対比する形や場面を対比する形では書けていないものの、自分なりの考えのもと評価を加えることができている。	評価・批評を加える際は、友だち意見を促されながらも「題名」を考えようとしている。
1	平和への希求や家族の絆、一つのものを大切にする心等について言及する読み取りができていない。戦争は怖いという一般論に終始している。	自分の恣意的な読み取りで本教材の「主題」を記述している。	自分の恣意的な読み取りで「批評・評価」している。	自分なりの考えを主張のみでしか書けておらず、論理性に欠ける。	評価・批評を加える際は、自分で考えようとはせず、友だちの意見をなぞって書くことに終始している。